

高校人国記

広島大学付属高校(広島市南区)②

放送や芸術分野 出会い糧に輝く



広島大学付属高校の全景。下方(西)の道路は
国道487号。広島電鉄宇品線が通る



〈かつての卒業生＝学術・文化・マスコミ〉
中井正一(1900～52年) 美学者。評論家▽紙恭
輔(02～81年) 作曲家。指揮者。戦後のジャズ
・ブームの草分け▽原民喜(05～51年) 詩人。

小説家。被爆体験に基づく小説「夏の花」など▽阿川弘之(20～2015
年) 小説家。代表作に「春の城」「雲の墓標」。文化勲章を受章。広
島県名誉県民▽橋川文三(1922～83年) 政治思想史研究者。評論家▽
新延輝雄(22～2012年) 洋画家。日展評議員▽松元寛(1924～2003年)
英米文学者。広島大名誉教授▽広中俊雄(1926～2014年) 法学者。東
北大名誉教授▽山本治朗(1948～2019年) 中国新聞社社主兼会長▽頼
近美津子(1955～2009年) NHK、フジテレビアナウンサー。



マスコミや文化、芸能界に卒業生は多い。勝
丸恭子(40)は横浜国立大を卒業。民間放送局を
経て10(同22)年からNHK広島放送局で気象
キャスターを務める。「この仕事に出会うまで
相当回り道をしたが、回り道で経験したことが
全て今に役立っています」。高校時代で印象
深いのは体育祭。「学校全体が1年がかりで準
備を進める力を入れよう。大掛かりなものを成
功させる努力や苦勞、みんなで一つの物を作り
上げる楽しさと感動は宝物といえる経験です」



勝丸恭子

昨年6月、テレビ朝日の人事異動が大きな話
題となった。太下容子(50)が役員待遇のエクゼ
クティブアナウンサーに昇進したのだ。同局の
現役アナでは初めて。2019(平成31)年には
長年司会を務めてきた昼の情報番組が、自身の
名を冠した「太下容子 ワイド!スクランブル」
に。柔らかな語り口、安定感。同局の顔である。
高校時代は勉強や部活のバレーボール、文化
祭、体育祭と目の前のことに全力で取り組んだ。
文化祭ではガールズバンドを組んで演奏した。
そんな毎日を振り返り「今を生きていることを学ん
だ気がします」。慶応大を卒業し同局に入った。
「番組に名前が付くと聞いた時は驚き重荷
に感じました。でも先輩、後輩、社内外の女性
がとても喜んでくれた。それが自分の喜び。自
分自身は何も変わっていない。目の前のことに
全力で取り組むだけです」



テレビ朝日エグゼクティブ
アナウンサー 太下容子

勉強や部活、文化祭に全力。今を生きること学んだ



作曲家 柊場富美子

マスコミには元テレビ朝日プロデューサー皇
達也(79)や広島ホームテレビアナウンサー坪山
奏子(37)もいる。
作曲家で東京音楽大教授の柊場富美子(68)は
幼時から習ってきたピアノを高校1年の間やめ
た。親の期待もあつて勉強に専念したのだ。だ
が周囲には「桁違いに頭のいい人」が何人も。
「このまま好きな数字をやっても芽が出ないの
では」と迷った時声を掛けてくれた人がいた。
小学1年からソルフェージュ(読譜や聴音など
の基礎)を学んだ戸田繁子だ。「あなた音楽を
やった方がいいよ」。
東京芸術大へ進み作曲家に。27歳の時の作品
を改訂した「広島レクイエム」は世界的指揮者
バンスタインが開いた「広島平和コンサート」
で演奏され、一躍注目を集めた。毎年8月6日
の灯籠流しで被爆の惨状を聞いて心に抱いてい
た慰霊の気持ち。それをやっとな作品にすること
ができたのは戸田の「何か広島をテーマに作曲
したら」の言葉だった。「私は広島に育ってい
たのだです」。
昭和音楽大教授で「日本のオペラ年鑑」編さ
ん委員長の石田麻子(55)は舞台芸術の運営や人
材育成を研究。19年にはオペラなどの上演を90
本見たという。音楽界では他に作曲家横山潤子
(60)や音楽社会学者井手口彰典(42)、ウッドベ
ース奏者吉野弘志(66)、日本のトップクラスの
合唱団「東京オペラシンガーズ」代表寺本知生
(66)たち大勢が活躍している。
映画界にはプロデューサー天野和人(60)や映
画監督信友直子(59)、同長谷川和彦(75)がいる。
天野は高校時代、8人映画づくりに参加。アル
バイトで映画館のPR冊子に映画の紹介も書い
た。文化祭で上映された鈴木清順監督作品「け
んかえれいじ」を見て「こんな映画があるのか」
と思ったのが映画との本格的な出会いだった。
早稲田大を卒業し東映に。呉市を舞台にした

桁違いに頭のいい人が何人も。自分を見つめ音楽の道へ

「孤狼の血」をはじめ数々の映画でプロデュー
サーを務めた。後輩へは「人生は思い通りにな
らない、だから面白い。まあ何とかなる。そし
て歌の文句ではないが『人生はあなたが思うほ
ど悪くない』」



天野和人



信友直子

信友は東京大を卒業。コピーライターを経て
テレビレクチャーに。18(同30)年、認知症
の母と老老介護する父を自ら撮影した映画「ほ
けまさから、よろしくお願ひします。」は大き
な反響を得た。その経験を通して感じたことを
現在、本紙くらし面で「認知症からの贈り物」
と題して連載している。
高校2年の時、現代国語の宿題で書いた小説
に対し文豪の風貌の教師から「書ける人だと思
った。将来が楽しみだ」との講評。うれしくて
「将来は文章を書く表現者になろうと初めて思
った」と回想する。19年には母校で講演。ある
女性記者との出会いからドキュメンタリー制作
という「天職」と出合った経緯を語り「チャン
スに出合った時ちゃんとかむ勇氣と覚悟、こ
れがチャンスだと気づく感性を持つてほしい」
と呼び掛けた。

(客員編集委員・富沢佐一)

次回は16日に掲載します。

「高校人国記」は広島、山口両県を中心
に回って、高校ごとに話題の卒業生を紹
介しています。各校の情報をメールなどで
お寄せください。
宛先は〒730-0867 広島市中区土
橋町7の1、中国新聞編集局 高校人国記
係。
メールは bokou@chugoku-np.co.jp